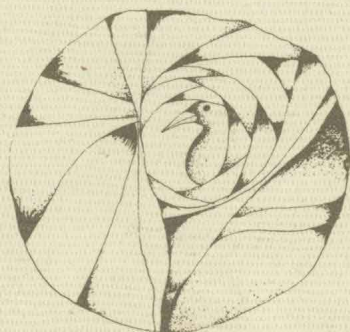


貴種と転生

四方田犬彦



新潮社

貴種と転生



四方田犬彦

新潮社

〈著者略歴〉

一九五三年西宮生。東京大学文学部にて宗教学を専攻。同大学院比較文学比較文化科博士課程を修了。ソウル・建国大学にて日本語・日本文学を講じたのち、現在は東洋大学文学部講師。「GS」編集委員。映像論から韓国論、文芸批評まで幅広い領域にわたって批評活動を続ける。著書に『映像の招喚』（青土社）『クリティック』（冬樹社）『われらが〈他者〉なる韓国』（パルコ出版）『叙事詩の権能』（哲学書房）などがあり、コリン・ウイルソン、ノーマン・O・ブラウンの翻訳がある。

貴種と転生きしゆてんせい

一九八七年八月一五日印刷
一九八七年八月二〇日発行

著者 四方田犬彦よもたぬいひこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部）03—二六六—五一—

（編集部）03—二六六—五四—

振替 東京四一八〇八

印刷 東洋印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

定価 一五〇〇円



© 1987, Inuhiko Yomota
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り）
（下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-367101-7 C0095

貴種と転生・目次

第一章 五衰の悦び

7

第二章 異界の変容

55

第三章 偽史と情熱

105

年譜・索引					
225	II	後記 I	註	第五章 スパルタ	第四章 貴種の終焉
	220	218	216	187	147

装帧 吉岡 実

装画 難波淳郎

貴種と転生

第一章 五衰の悦び

今昔、釋迦如未、未ダ佛ニ不成給ザリケル時ハ釋迦菩薩ト申テ兜率天ノ内院ト云所ニゾ
 住給ケル。而ニ閻浮提ニ下生シナムト思シケル時ニ、五衰ヲ現ハシ給フ。其五衰ト云ハ、一
 ニハ天人ハ眼瞬ク事无ニ眼瞬ロク。二ニハ天人ノ頭ノ上ノ花鬘ハ萎事无ニ萎ヌ。三ニハ天人
 ノ衣ニハ塵居ル事无ニ塵・垢ヲ受ツ。四ニハ天人ハ汗アユル事无ニ脇ノ下ヨリ汗出キヌ。五
 ニハ天人ハ我が本ノ座ヲ不替ザル二本ノ座ヲ不求シテ當ル所ニ居ヌ。
 其ノ時ニ、諸ノ天人、菩薩此相ヲ現シ給ウ見テ、恠テ菩薩ニ申シテ云ク、「我等、今日此
 ノ相ヲ現シ給ラ見テ身動キ心迷。願クハ我等ガ為ニ此ノ故ヲ宣ベ給ヘ」ト。菩薩、諸天ニ答
 テ宣ハク、「當ニ知ベシ、諸ノ行ハ皆不常スト云事ヲ。我今、不久シテ此ノ天ノ宮ヲ捨テ閻
 浮提ニ生ナムズ」ト。此ヲ聞テ諸ノ天人歎ク事不愚ズ。此テ菩薩、「閻浮提ノ中ニ生レムニ、
 誰ヲカ父トシ誰ヲカ母トセム」ト思シテ見給フニ、「迦毗羅衛國ノ淨飯王ヲ父トシ摩耶夫人
 ヲ母トセムニ足レリ」ト思ヒ定給ツ。

『今昔物語・天竺部』卷一の冒頭、「釋迦如未、人界宿給語」なる説話の、前半に相当する
 部分である(註一)。

あるとき、兜率天にいた釈迦如来が人間の、世界に生まれ出ようと思つたとき、その軀に五衰の

徴候が生じた。天人であれば本来はしないはずの瞬まばたきが始まり、頭上にいただいている花鬘が萎んだ。衣服に塵や垢が付着し、脇の下に汗がにじむようになった。天人は自分の場所にじっと坐つたままでいるのが常であるのに、落着かず、ふらふらと場所を移るようになった。周囲の天人や菩薩たちはこの様子を見てひどく悲嘆し、原因を尋ねた。釈迦は万物の流転を説き、自分がまもなく天宮を捨て人界に降下することを予告した。

続く後半部では、迦毗羅衛國淨飯王の妃摩耶夫人が夢に白象の到来を見、託胎を授かったという、有名な物語が語られている。第二話は次のようである。夫人が八万四千人の侍女を連れて无憂樹ウヱツの下を訪れ、孔雀の頸のように青緑に美しく輝く枝を折ろうとした瞬間、右の脇下から全身黄金色をした太子が生まれ、非常な光明を発した事。無数の天人、天魔、梵天、沙門、婆羅門がことごとく集い見守るなかで、太子が四方に足を運ぶと、その足跡のひとつひとつに蓮の花が生じた事。天界からは楽の音が聞こえ、羽衣や瓔珞が雨のように降り注いだ。これが『今昔物語』の最初の二話である。

以下、『天竺部』では、八相成道と呼ばれる、釈迦の生涯の重要なエピソードが順を追って紹介されることになる。十七歳のみぎり、王宮の東西南北四方の門外に老人、病人、死人、僧侶を見て、出家を決心したこと（四門遊観）。十九歳で王子としての地位も財産も三人の妻も捨て、城を出たこと（出家）。森中の仙人たちを訪れ、六年の修行を積んだこと（苦行）。他家自在天の天宮に誘おうとする魔王の悪計を退け、調伏したこと（降魔）。非常な光明を放つて禪定に入り、悟りを開いたこと（成道）。五人の比丘を手始めにして、衆生に法を説くに及んだこと（転法輪）。こうして、天人五衰に端を発した『今昔物語』は、釈迦の生涯をゆるやかな時間順序に沿って語りながら、震旦、本朝に及び、しだいに巨大な物語の集積としての輪郭を頭あたまわにするにいたる。

一二世紀の前半に成立を見た『今昔物語』については、現在なおごくわずかのことしか知られていない。日本文学史上最大の規模を誇る説話集でありながら、編纂者が誰であったかすら明確ではない。また、一千をゆうに越える説話の厳密な出典についても、いまだに国文学界で定説をみない。『天竺部』についていえば、梁の僧祐撰『釈迦譜』を中核にして『過去現在因果経』を参看したのではないかという推測が一応なされてはいるが、単に仏典のみならず、インドの古代叙事詩である『マハーバータ』から玄奘の『大唐西域記』まで、まさにアジア的といふべき広範囲なテキスト間の交通が豊かに横たわっている。それは、喩えてみるならば、インドに無数の源をもつ水流が中国を経廻るうちにしだいに大河へと成長し、東端の日本に及んで巨大な物語の大海をなすにいたったという印象を与える。

では、こうした多様かつ大量の物語が十把ひとからげに並置されているのかといえ、けつしてそうではない。『天竺部』の五巻だけを考えてみても、説話の編纂の仕方にはみごとに一貫した整合性が存在している。巻一では釈迦の生誕と成道、教団の成立を軸として物語が集められ、巻二は釈迦本人による教化が中心となる。巻三は釈迦在生中の弟子たちの事蹟と仏の入滅、巻四は仏滅後の弟子たちの教化、そして巻五には補遺として釈迦出生前の古譚と仏の本生譚が主眼となるといったふうに、時間軸にそっておおまかではあるが秩序が立てられている。五巻全体の大部分を占める教化活動（転法輪）の説話は、教化の対象が釈尊の近親者、国王、長者、無名人といった具合に社会的地位に応じて順序付けられ、二つの相似した説話が一組ずつ並ぶという形式が採用されている。こうした配列秩序は『天竺部』に限ったことではない。続く『震旦部』『本朝部』においても、仏教の伝来がまず語り起こされると、仏、法、僧の順に説話が並べられ、最後に世俗に至る。二類話をもって一組となすという律も同様である。一見いかにも雑然とした物

語の寄せ集めであるように見えながらも、『今昔物語』はひとたび目を凝らしてみれば、実に整然とした秩序によつて精密に拵えられた三幅のマングラ面に近いことが、こうして了解できる。

天竺、震旦、本朝。これは平安時代の日本人にとつてほほ世界の全域に相應していた。三世界に生起する泡粒のような無数の物語を、ひとしく釈迦の因縁譚として組織し、統轄すること。それは、物語という媒介を用いてイデオロギーとしての仏教が全世界を秩序付けることを意味していた。ノースロップ・フライは『偉大なるコード』のなかで、聖書を単に信仰の座右の書としてのみ読むことを退け、天地創造から終末にいたるすべての事件を含有し、百科全書にも似た莫大な知を収蔵した豊かな文学的テキストとして検討する可能性を示唆している（註②）。

このカナダの文芸批評家の響みに倣うなら、あるいは『今昔物語』全三十一巻にも、物語を通して獲得された、世界の総体をめぐる知の集蔵庫（コレクトリヤ）という名を与えても許されるべきかもしれない。直接の文字言語のうえで体験であれ、口承言語を媒介としての体験であれ、『今昔物語』に収録された説話に接した者たちは、単に啓蒙の対象として仏教と呼ばれた同時代の支配的イデオロギーを受け入れただけではなかつた。彼らはこの莫大な説話集成を通して、自分たちが現実においている世界の東の辺境と、そこからはるかに隔たつてゐるはずの釈迦生誕の聖地との間に、ある必然をもつた連続性を確認することができた。また、物語の力にそつくり身を預けることで、時間と空間の全体性を神話的に体験しえたのである。

だが、ここで興味深いことは、先にも述べたように日本最大の説話集である『今昔物語』が、そもそも天人五衰の記述から語り起こされているという、一見不思議な事実である。天人が天界から失墜する直前に軀に浮かびあがつてくるという五つの不吉な徴候への言及が、なぜに一千余

もの物語の冒頭に据え置かれなければならなかったのか。先に述べたように、『今昔物語』の不詳の編纂者がきわめて精緻にして周到な配列を全編にわたって行なっていたことを考えあわせてみよう。彼がとりわけ『天竺部』の巻頭にどのような説話をもつてくるかという重要な問題に、配慮を払わなかつたわけがない。いや、このような論の立て方は、ひよつとして正しいものではないのかもしれない。釈迦の誕生によつてはじめて仏の知ろし食す世界が人界に開闢したというのであれば、その降兜率と摩耶夫人の被託胎の物語に目を伏せ、それを省略することは不可能であつたのではないだろうか。したがつて、質問を少し訂正してみよう。われらが編纂者（あるいは言葉替えるならば、巨大なテクストが結果的に作りあげてしまう統轄的な主体）は天人五衰の挿話を巻頭に据えることで、それをどのように解釈していただろうか。ここには『今昔物語』全体の大部の構成の要となる本質的な何事かが、暗黙のうちに語られているのではないだろうか。

編纂者は、天界の釈迦菩薩に五衰が現われたという伝承に関して、同じ天界に住まう他の天人や菩薩とはあきらかに違つた意見を抱いている。本稿の冒頭に引いた引用を読むかぎり、天界の住人たちはといへば、同胞の釈迦の軀にいきなり現われた衰相を前にして不審に思い、悲嘆に暮れる。しかし、けつしてその意義を理解しえないでいる。それに比べて、釈迦は実に平然と万物の流転を説く。彼は、間近に迫つてゐるはずの人界での生誕を心待ちにし、降臨すべき母胎を物色している。五衰はここでは、釈迦の自己同一性が新しい状態に移行するために欠くことのできない、ある積極性を帯びた事件として考えられている。もし仮に釈迦の頭上にある華美なる髪飾りが萎まなかつたとすれば、また彼が汗や垢といった人間に特有の汚穢と無縁のまま同じ座に留まっていたとすれば、降兜率も生誕もありえなかつたであろうし、転法輪も入滅も生起しな

かつた。当然のことながら仏教が地上に広まることもなかったであろう。天人五衰をわが身の宿命として是認する釈迦には、ニーチエの『ツアラトウストラ』の主人公を連想させるところがないわけでもない。ツアラトウストラは長年住み慣れてきた清澄な大氣の高山を後に、塵埃に満ちた俗界へ「没落」することをみずからの運命として甘受する。彼の説く超人哲学は、この没落ゆえにわれわれのもとに届けられたのである。

物語の側に身を寄せる者のすべとして、『今昔物語』の編纂者は、天人五衰にユダヤキリスト教の伝統にみられるルシファー失墜のような否定的陰影を与えようとはしなかった。彼はあきらかにそこに肯定的な契機を読みとっていた。なべて物語といわれるものの内側では、当初にある平衡状態が破れ、運動（移行、変身）が生じる。それは一時的な渾沌状態を惹起する。それは究極的には別の平衡状態に達し、新たに秩序の回復がなされる。釈迦の五衰は天界の秩序を混乱させ、その帰結として摩耶夫人の光明と祝福に満ちた分娩をもたらした。そして夫人の不幸な死は逆に彼女を忉利天の住人に変えた。万事はひとまずここで平衡に達したようにみえる。だが、それ以上にこの冒頭の短い物語は、次々と別の物語を誘発する。結果的に天竺、震旦、本朝において生起することになる千余の物語を可能にし、それに強い根柢を与える。五衰の記述とは、いかなればあらゆる物語を始動させる「最初の一撃」であり、天界においてこそ演じられるにふさわしい、ある超越性を帯びている。われわれの遠い先達である未知の編纂者は、この出来事の本質、すなわち死であるとともに生でもあるという両面価値的な性格を了解するだけの想像力を、生理的に体得していた。天界においては汚穢であり凶事である釈迦の五衰も、ひとたび人界から見直してみるならば聖なる顕現であり吉兆であると知悉していた。衰退が死を招き、死が光明に満ちた再生に他ならないという認識。物語をその全体において生きるとはそのようなことである。